

新マルクス・エンゲルス全集 全114巻 (予定)
Marx-Engels-Gesamtausgabe (MEGA). ca. 114 Bde.

(指定代理店：極東書店)

新MEGAの編集・刊行は旧ソ連・東欧諸国の崩壊などの影響を受けて、事業中断の危機にさらされましたが、1990年に設立されたアムステルダムの「国際マルクス・エンゲルス財団」が事業を引き継ぎました。現在「学術化」と「国際協力」の旗印の下に編集がすすめられ、2005年には日本人研究者による初めてのMEGA巻も刊行されました。これまでにおよそ75巻が刊行されており、2012年には第II部が完結しています。人類が生んだ知的宝庫であるマルクスとエンゲルスの著作類を漏れなく所蔵するために、本『新マルクス・エンゲルス全集』の継続ご注文をお薦めいたします。

(既刊部分に関してはお問い合わせください。)

《新着》

第IV部・第14巻:抜粋・新聞切抜き・覚書:世界経済恐慌
1857年11月～1858年2月

Marx, Karl / Engels, F., Gesamtausgabe (MEGA). Abt. IV/Bd. 14: Marx, Karl, Exzerpte, Zeitungsausschnitte und Notizen zur Weltwirtschaftskrise (Krisenhefte). November 1857 bis Februar 1858. Text / Apparat. Bearb. von K. Mori, R. Hecker, I. Omura, A. Tamaoka. IX, 680 S. 2017 (de Gruyter Akademie Forschung, GW) <637-27a>
ISBN 978-3-11-051765-1

★Kunstleder

【詳細は次ページをご覧ください。】

《近刊》

第I部・第7巻:1848年2月から10月までの著作・論文・草稿 全2巻

Marx, Karl / Engels, F., Gesamtausgabe (MEGA). Abt. I/Bd. 7: Marx, Karl, Werke, Artikel, Entwürfe Februar bis Oktober 1848. 2 Bde. Bearb. von J. Herres, F. Melis. XVII, 1774 S. 2016 (de Gruyter Akademie Forschung, GW) <631-43a>
ISBN 978-3-11-045760-5

★Kunstleder Zus.

〔全4部の構成〕

第I部 著作・論文・草稿

第II部に収録される『資本論』関係のものを除き、哲学・経済学・歴史および政治に関するあらゆる著作・パンフレット・論文・草稿が年代順に収録されます。

第II部 『資本論』とその準備著作

『資本論』の著者認許の各版(翻訳を含む)のほか、これに直接関連する著作や草稿が収められます。

第III部 書簡集

二人の手紙・葉書・電報のほかに、付録として第三者から二人宛てた手紙が含まれます。

第IV部 抜き書き、ノート、欄外書き込み

抜き書きノート、個々の抜粋、年表、文献目録のほか、ノートブック、住所録、領収書、覚書が収められます。

MEGA 第 IV 部第 14 卷

『抜粋、新聞切抜き、覚書：世界経済恐慌 1857 年 11 月から 1858 年 2 月』

摘要

1857 年恐慌：グローバル経済危機のプロトタイプ

1857 年、人類史上初の世界恐慌が勃発した。2008 年と同様にアメリカの金融危機に端を発した恐慌は、イギリスに伝播しヨーロッパ全土、そしてロシア、インド、中国などを含む世界市場を席卷していく。

『経済学要綱（グルントリッセ）』『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』 経済論説との関連

折しも当時「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」紙の記者としてヨーロッパの経済動向を執筆・掲載していたマルクスは、恐慌勃発後ただちに、同紙への論説と並行して新たな二つの研究プロジェクトを開始した。一つは資本主義における恐慌発生の必然性を理論的に解明することであり、もう一つはヨーロッパおよび世界市場において目下進行中の恐慌現象についてデータ収集・分析することであった。前者が 1857-58 年『経済学批判要綱』であり、後者が 3 冊のノート、いわゆる『Books of Crisis』であった。これらのノートは、以前より『恐慌論ノート』として研究者にはその存在は知られていたものの、その内容は事実上ブラックボックスとして扱われ、上記「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」経済論説および『経済学批判要綱』と密接に関連する経済学文献としてその内容の公開は垂涎の的であった。

市場の圧倒的な多様性

同年に刊行されたトゥック『物価史』第 6 巻を直前まで熱心に研究し、抜粋を作成していたマルクスは、あたかもその衣鉢を継ぐかのように、1857 年恐慌の研究に際して市場動向の綿密な調査を企てる。『恐慌論ノート』は「1857 年 フランス」「1857 年の恐慌の部」「商業恐慌の部」の 3 冊からなる抜粋ノートである。総計 191 頁からなり、エコノミスト、タイムズ、スタンダード、マンチェスター・ガーディアン、モーニング・スターなど、主として 12 の新聞・雑誌から、1857 年 11 月 7 日付から 1858 年 2 月 20 日付にわたって行われた約 1000 件の切抜きと多数の抜書きを含む。そこではデータの分類がまず国別に行われ、それはフランス、イギリス、ドイツを中心にイタリア、スペイン、オーストリア、アメリカ、中国、インド、エジプト、オーストラリアに及ぶ。ついで地域ごとにデータが項目ごとに整理され、取り扱われる項目は、貨幣市場データ（利子率、中央銀行収支、銀行券流通残高、地金準備残高、為替相場、国債価格、株価など）、商品市場データ（一次産品価格、工業製品価格、輸出入など）さらには企業倒産、失業、操業短縮、賃金、労働争議などを包括している。

産品市場と生産物市場のギャップ

『恐慌論ノート』は中期マルクスの恐慌研究に属し、この時期には、過少消費や利潤率低下などという後期の恐慌分析視角は見られず、編集者序文によれば、むしろ、先行する 1850 年代前半の好況期に行われた巨大な設備投資を背景として、恐慌の発現を国際的な一次産品市場（produce market）と国内の製品市場（industrial market）とのギャップに見出す、いわゆる「ダブル・クライシス double crisis」の構想が見られるということである。近年注目を集めている、2008 年金融恐慌の勃発とそれに先行する 2000 年来の原油、鉄鉱石など産品価格の高騰との関連を考慮するとき、現代的な意味をも有する視点である。『要綱（グルントリッセ）』の理論的課題を理解するうえでも必読の書。

守 健二 （東北大学大学院経済学研究科教授）